

分科会「入門講座」

歴史掘り起こし運動から学び得たもの

中根 伸一（札幌歴史研究会）

1) 私の歴史研究の始まり

私は、聾学校で学んだ教科の中で一番好きであったのは、社会科でとりわけ歴史に関する分野でした。参考書は、日本史に関するものばかり買い求めていました。日本史はひとつの物語のように、いろいろな経過を通りながら今日までたどって来ています。私の知らない世界が本の中にあり、目を輝かせて飛び込み、夢中になっていました。

昔の聾学校は、1人の先生が全科目を受け持つ



のが普通でした。先生にも得手、不得手というものがあったと思います。ある時、社会科で日本史の授業中のことでした。内容は南北朝時代でしたが、先生は、参考書の記述と全く違うことを述べていました。私が「先生、間違っていないですか」と手を挙げて、具体的な内容を説明しました。私の祖先は、南北朝時代の落ち武者の流れを組む奈良県の十津川郷士でしたので、その部分に関してはちょっとした知識があったわけでした。

しかし、先生はその日から、とうとう歴史の授業は全然やらなくなってしまいました。昔の聾学校教育は、いいかげんなもので、不得手な学科は、適当に自習させたりしていました。職員室に帰った先生のいない教室のなかで、私が仕方なく生嚼りの日本歴史を話したりする羽目になりました。歴史の話を代役させられる以上、いいかげんなことは出来ないなあと思いながら、猛勉強することになりました。それで、ますます歴史ものにはまり込んで行きました。

私の歴史研究の素地は、そうしたことから育つ

たわけですが、高校へ進学すると、職業科であったために、歴史に関する授業は省かれていたので、次第に遠ざかりすっかり忘れてしまいました。

2) 民衆史掘り起こし運動と巡りあって

今から30年前の北海道では、戦後30年にあたって各地から「民衆史掘り起こし運動」がりょう原の火の如く広がりました。小さな山奥の辺地や、廃坑地、廃線の村々や工場跡地、アイヌ部落などから、古老や一般町民、農民、学生、僧侶、学校教師、主婦、役所の個人たちが立ちあがって、この地に隠された歴史を掘り起こす運動に加わりました。自治体が発行している町史に綴られていない裏面史、語り伝えられている古老たちの昔話を調べて、実証して行こうという運動でした。

そのころの私は、卒業後、当然の如く先輩に薦められてろう運動に熱中してから20年も過ぎたところで、歴史研究は書物以外、全く関心を持っていませんでした。

ある時、強制連行の生き証人とその加害者の話しを聞く民衆史講座を開くという新聞記事が目にとまりました。私は、記憶の底に閉じ込められ、眠り込んでいた歴史研究への興味が再びメラメラと燃えました。

当時は、手話通訳者が配置されていましたが、個人的な学習には派遣の対象外であったので、まだ小学生であった息子を通訳に連れ出して出席しました。

たどたどしい通訳のなかから知った「真実の歴史」は、私が今まで学んだ日本史には、書かれていない内容のものでした。証言者は、時々、苦悶した表情を浮かべながら次々と、この世にあったこととは信じられない証言が繰り返されました。さらに続いて、加害者であった人が、自分たちのやったことを涙を流しながら、いろいろと証言しました。

その時、私は、カミナリに打たれたような衝撃を受けました。民衆史掘り起こし運動は、今まで学んだ歴史と違って、きれい事ではなく、聞くに耐えないほど、身の毛がよだつ恐ろしいものであったことを知りました。あれから私はもう民衆史掘り起こし運動に魅せられ、取りつかれて、講座が開かれるたびに出席し、いくつかのフィールドワークにも参加しました。そこで学んだ民衆史掘

り起こし運動の原点とそのエネルギーは何だったかを話したいと思います。

3) 民衆史掘り起こし運動とは何か

1969年(昭和44年)、北海道開拓100年の記念行事が行なわれた時に一人のアイヌ人、山本エカシが、こう訴えました。アイヌモシリ(北海道)は「侵略され搾取され謀略の限りを尽くしたシャモ(和人)たち、明治政府に完全に侵略された100年でございます。この長い年月の間、忍従を重ねてかろうじて生きてきた。そこには貧困、栄養不良、多くの伝染病、あらゆる苦労を重ねたのでございます。これを少数民族の悲惨だなどと、やすやすと片づけられる問題ではないはずです。重大問題です。・・悪業、非道の悪魔の子孫ども、皆さんの顔をみていると、だんだんと赤鬼、青鬼の顔に見えてきました。」この告発に衝撃を受け、多くの良心的な人々が心の痛みを感じました。

こういった契機で、北海道開拓の本当の歴史を自分たちの手で調べたいと思うようになりました。今までの北海道開拓史には、権力者側に都合のよい部分で綴られており、底辺に生きた人々の苦悩の記録は大きく欠落したものでありました。開拓至上主義の「開拓史観」は皇国史観につながり、開拓という美名のもとに隠された事実をも否定するような危険がはらんでいました。



この掘り起こし運動は、いろいろな分野から生まれて来ました。例えば、自由民権運動に参加したため、特高に追われて北海道へ逃れた人々や、滅び行くアイヌ人たちの人権問題、強制連行した朝鮮人の実態と民族差別の事件、監獄に入られた囚人への虐待や開拓の事実、小作農争議した人々の実態、権力側の横暴と戦った民衆の抵抗運動など、多岐にわたる分野から調査研究が広がって行

きました。

その記録を取録した本の題名は「語り出した民衆の記録」となっています。つまり、権力側からの迫害を恐れて長い間、黙して語らなかった名もなき民衆たちが、歴史の事実を自ら語り始めた意味を端的に表現しています。主に底辺に生きた人々の証言を掘り起こした生々しい記録が綴られていました。

それらの運動のエネルギーは、それぞれの事件に直接加わらなかった人々の「人間としての心の痛み」から出発しています。その心の痛みについて話したいと思います。

4) 人々の「心の痛み」の克服

私たちが、「ろうあ問題研究ゼミ」を立ち上げた時に取り組んだ「長谷川証言」の調査研究は、当初、本人が証言拒否するという壁にぶつかりました。

私たちの取り組みの姿勢に大きく関わっていたことに気が付いたのはずっとあとでした。

それは、本人の心の痛みを考えようもしないで、事の起こりを追求することばかりしていたからでした。民衆史を研究していた人から教えられ、その人の「心の痛み」を感じとって話を聞く姿勢の大切さを教わりました。その考え方が正しかったために、長谷川証言の全貌が明らかにすることができたのです。長い間、黙して語らなかったのはなぜだったのか。今、思い出すと本人に取っては告白すること自体が、非常に大きな勇気の要ることであったんだと思います。

自分の人生に汚点があるんだと思い込んでいたことと、いくら話しても信じてくれるわけがないだろうというあきらめ。また、自分は死んだ人たちの亡霊を背負っているんだという迷信を信じていたこと。さらにまた、網走という地名は刑務所のあるところというイメージが人々に染み込んでいて、囚われていたという誤解を与える恐れなどが、本人の心を幾重にもかんじがらめに縛られていました。その心の痛みをひとつひとつ、解きほどこいていく作業は、並大抵ではありませんでした。

やがて、集まった人々の前で告白した本人は、全身から汗がしたり落ちるほどの大変なものでした。閉ざされた心は、全身からの汗とともに解き放たれ、自分の本当の人生が、今から始まるん

だという喜びが表れていたと思います。

5) フィールドワーク（現地調査）は 心の掘り起こしの旅路

程なくして私たちは、彼を中心とした現地調査の日程を組みました。調査に出発する前は、現地の民衆史掘り起こし運動の仲間たちと連絡を取り合っ、現地で掘り起こした証人たちと合流しました。強制連行で亡くなられた「タコ部屋」の人々を慰霊し、お寺の過去帳や、無縁仏の調査、各地のさまざまな類似事件の現場にも訪れました。彼は、この調査に加わって始めて、自分が関わっていた時代の全体の役割とその背景が、心のもやの中から次第と判りかけて来たように思います。今回の旅路は、彼の心の掘り起こし運動そのものであります。今まで自分が置かれていた社会的な背景とその問題意識は、私たちよりも、いち早く把握していました。告白者が「告発者」に成長し、歴史の生き証人である語り部として揺るぎない自信をもつようになって行ったのは、私たちのゼミに加入したあとでした。被害者や体験者も研究会に加入して、一緒に民衆の視点で問題を掘り起こして行くことは、その運動に欠かせない基本でした。それで、一緒に活動して頂いたわけですが、正直に言って私たちのろうあ問題研究ゼミは、彼から教えられ、リードされながら育ってくれたようなものでした。運動の基本から逸脱しがちな私たちには、無言の証人の存在として、いつまでも見守ってくれました。今は、時々頼まれて、講演に引っぱり張られています。得がたい歴史的な証人と出会ったことに、今でも感謝しています。私たちはいつまでも心の痛みを感じることから出発することの大切さを忘れない歴史研究者でありたいと思っています。

6) 私たちの出発点にもたらしたもの

北海道で繰り広げられた民衆史掘り起こし運動は、どんな方面に影響を及ぼしたかをかいつまんで話したいと思います。これは単に北海道地域に起こった事柄ととらえるのではなく、私たちの日本聾史学会のこれからのあり方にも問われる問題であると聞いていただければありがたい。

北海道の民衆史掘り起こし運動は、今は下火になっていますが、各地で細々と続けられています。その運動からたくさんの教訓が生まれました。

1つは、その人の人間的な復権を勝ち取ることです。「長谷川証言」で明らかになったように、自分は駄目な人間だという思い込みから立ちあがることです。それは、心の中にある「自己差別意識」の克服とも言えましょう。私たち学会の歴史調査研究は、常にそういう基本に立ち続けていきたいと思っています。

2つ目は、大学の歴史学者のように調査研究は個人の業績として1人占めにするのではなく、地域住民を巻き込んだ共同研究であり、また、共に正しい歴史観をもつ自己変革して行くことです。

3つ目に、作られた権力者側の歴史記録に疑問を持ち、証言者と現地調査をもとにして再構築していく大切さを共有することです。それぞれの事柄には突き詰めていくと、その時代の社会的な背景と構図が見えてきます。

4つには、明らかになった事実は発表し、後世に残す顕彰碑を建てたり、記録をまとめることの大切さです。その運動はやがて、この地域の町史にも書き加えられ、意図的な史観を正す力となって行きます。

以上の四つの教訓と指針が私たちの歴史研究にもたらされました。

7) これからの聾史学会に求められるもの(1)

私個人の歴史研究は、北海道のろう教育分野(篠崎清次研究)まで広げましたが、その後は、事情があつて10年ぐらい中断していました。日本聾史学会があることを知ったのは、研究仲間である京都の友人の誘いからでありました。結成前夜には加わらなかった田舎のひとりのろうあ者でした。第三回の豊橋大会で北海道代表として、役員に加わってほしいという要請を受け、名前だけ出したのが運のつきで、適当な人がいないことから、副会長に祭り上げられてしまいました。

しょうがないと思いながら今日まで続けてきています。わたしは決して学究肌ではありません。学会のなかには学究肌の人もあります。しかし、大部分の会員は、私と同じく、歴史に関心を示し、調べてみたいという気持ちを持っている方ばかりだと思います。大学の歴史研究者やそれを職業とする人とは立場が違う人々の集団である良さを持っています。

しかし、今までは果たしてその良さを発揮して来たのだろうか。副会長にいながらいつもその疑問につきまともわれました。この私でもこの疑問にまだ分析を加えていませんが、こうありたいという願いの形でこれからの日本聾史学会のあるべき姿を話してみたいと思います。

今までの研究発表の論文は、一部を除いて、個人研究の部分が多かったと思います。個人の能力を超えた資料調査と、おそらく聞えないことから生じる不便さを乗り越えての現地調査、そして多くの経費を自己負担した成果であったと思われる。それぞれの研究発表論文はどれも素晴らしく、価値の高いものばかりでありました。しかし、気がかりなのは、地域の研究集団からの共同研究の形の論文発表が少なかったことです。早くいえば、今の学会は研究の基本である情報開陳へは、まだ成熟されていないかと考えています。多くの歴史学者や専門家は、個人研究を基本としています。学者や専門家はともすれば、自分の研究成果を専売特許のようにして情報を開陳してくれません。非常に閉鎖的な人が多いと指摘する方がいます。

私たちの研究集団は、今、全国に7ヶ所しか組織されていません。250人にのぼる会員の多くは、何処にも加わることなく直接、学会に加入しています。年に一回の学会大会に参加し、発表した研究論文集を購入して下さっているような状態におかれています。共に研究課題を持ち、発見し、感動し喜びを共に分かち合い、自己の歴史意識を変革して行くというプロセスに恵まれていない方が多くおられると思います。研究する仲間がいなくてはどうしようもありませんが、この問題は創意工夫することによって克服できるだろうと思います。

例えば、「樺太調査団」の研究集団のような形が良い例です。自宅にいながらにして、全国の研究者たちとメーリングリストで資料を交換し合いました。また興味のある地域の会員外の人も含めて、纏め上げたレポートは貴重なものでありました。そういった形での共同研究も1つの方法であるかと思えます。仲間を求めて共同研究することには、地理的な隔たりは、たいした障害になりませんでした。大いに薦めたいやり方だと思えます。

8) これからの聾史学会に求められるもの(2)

もうひとつは、地域のろうあ者集団との関わり方です。自分たちの研究の成果は、地域の運動に還元していくという姿勢です。それがもっとも大切な研究集団の姿勢になります。地域との関わりのない歴史研究は意味のないものとは断定できませんが、私たちは何のために歴史研究を始めたのだろうか。

ここでもう一度、歴史研究とは何か、民衆史掘り起こし運動の原点と照らし合わせて考えてみたいと思います。

民衆史運動は、社会の底辺に生きる人々の人権回復を大きな柱にしていました。ろうあ者集団のろうあ運動もやはり、形は違えども人権回復運動と言えます。究極的には、同じ目標を求めて運動しているわけです。ですから、私たちの歴史掘り起こし運動の成果は、同じ視点でともに共有することなしでは、掘り起こし運動が正しく評価されない恐れが出てきます。純粋な学問的歴史研究は別ですが、生きた歴史研究には、やはり、その地域のろうあ者集団や手話サークルとのつながりが大切になるのではないかと考えています。

私の所属している札幌聾史研究会は、地元ろうあ者集団の機関紙に毎号「聾史寸話」を投稿し続けています。4年目になり、今は11月号で「第50話」になりました。また、毎年開かれる全道ろうあ者大会の研究分科会には、歴史セミナーの部門が設けられ、関心のある人々と歴史意識の深まりに努めています。それは、私たちが学んだ「みんなと共に歴史研究をして行こう」という基本精神を固執しているからです。研究した成果をみんなと共有し、その喜びを分かち合いたいという気持が大切ではないかと思っています。

そういう基本的な姿勢こそ、これからの日本聾史学会の発展につながるものと強く信じています。多くの人々からの信頼と、共感、支援があつての学会でありたいと願っています。

とりとめのない話でしたが、これで私の聾史入門の話を終えます。ご静聴ありがとうございました。

(平成17年11月26日 日本聾史学会長岡大会)